

人文学の要求

—「人文論叢」の廃刊に寄せて—

高 橋 達 明

人文学会の解散と、それに伴う「人文論叢」の廃刊の予告に接してから、さながら谷の水のように流れた歳月の影が心にしきりに揺曳する。それで、紙幅を取って恐縮ながら、終刊号に感想を寄せることにした。

私が「人文論叢」に寄稿した最初は、1973年12月刊の第22号である。正式に会員になるのは翌年度で、その年はまだ非常勤講師であった。「マラルメ詩集」のソネ篇から、無題のソネの一篇（「時の香りのしみついた、いかなる絹が」）を選んで、解説をこころみただが、夏休みに集中的に取り組む中で、忘れられない経験をした。マラルメの後期ソネ、とくに無題のソネは、ページを開いた人にはすぐわかるように、意味の海の底しれぬ深みから噴きあがる波にも似たニュアンスが見えては隠れ、消えては現れる、水面の光のダンスを思わせる、音韻の一定の持続であって、容易には読めない。解説はああでもない、こうではないと、思案を重ねて組み立ててゆくわけだが、よし、これだという決着には、はっきりしたサインがある。よろこびというか、うれしいというか、一種の安心を自覚する時が、それである。そのサインがあった、ある夜更け、庭に出たら、蟬（アブラゼミ）の幼虫が板壁にとまって、羽化しようとしていた。縦に裂けた背中の中茶色のキチン質の殻のはざまに腹の先を残して、あおむけにぶらさがっている。じっと見ていると、しだいに身を起こすとともに、小さく折り畳まれていた、白くみずみずしい羽が伸びるようにゆっくり広がってゆく。数本の翅脈の、透き通ってゆく白に映える、うすら青い緑の勁い線。神秘にあふれる美しさであった。蟬脱という言葉が心に浮かんだのは、時

間がかなりたってからである。その間、私が生きていたのは、蟬脱という言葉であった。

人間という存在にとって、言葉以上に大切なものはない。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが明言したごとく、人間は言語によってはじめて人間である、だが、言語を發明するためには、人間はすでにして人間でなくてはならない（「比較言語研究について」）。

そして、言語を一人の人間という主観から見ると、言語は母語であり、かつ、生きられた経験としての言葉である（なお、母語は無数で、それらに価値の大小はない）。

近頃（近頃でも、と言うべきか）、鳥類の鳴き声によるコミュニケーションを言語と呼び、人間の言語になぞらえる研究者もあるようだが、それはかなり不徹底な考え方にすぎない。動物は、どの階層の動物であっても、むろん、世界を固有に分節しているけれども、それは感覚・運動能力に由来する、非言語的な分節であって、いま、ビューラーの人間言語の三機能説（表出、信号、叙述）の用語を使うなら（「言語理論」）、叙述機能による言語的分節ではない。動物が社会生活の中で（自分を）表出しつつ、（仲間に）送っている信号は、世界を分節する機能をそなえていない。人間も表出し、信号を発するが、それらの機能は乳児期をとってみても、分節機能に発達してゆくところに、動物との質的な差異がある。動物のことはとしてみても知られるミツバチのダンスにしても、カッシーラーがビューラーの論文を引用してつとに指摘しているように（「シンボル形式の哲学」第3巻）、花のにおいという現実の事象を媒介とするから、真の意味での象徴（記号）では当然ない。

人間も自然の中で自然を生きているが、それは裸の自然ではなく、母語の叙述機能によって分節された世界、意味の衣をつけた象徴の世界である。

さらに、ポパーが四機能説を提唱して、ビューラーの三機能に論証機能をくわえたことに注意したい（「推測と反駁」）。

話はとぶが、先日、蜂谷昭雄の論文集「詩神の巡幸」を読みかえしていたら、教養部（京大）についてのエッセイに「今は役にしか立たない英語がます

ますはばをきかしそうである」と書かれてあって、考えさせられた。蜂谷さんはヨーロッパの言語はポルトガルからロシアまで、さらに、アラビア語、中世ペルシア語、とくに好まれた古代語はギリシア、ラテンから、サンスクリット、アラム、聖書ヘブライ語まで縦横無尽の由で、私は学部の英詩講読の授業に出ていたにすぎないが、先生の読みの鋭敏、記憶の強靱、文献の博尋には、真に驚くべきものがあった。論文集（遺著）の編者のあとがきに「氏は言葉を愛する人であった」とある。周知のように、philology（文献学）の語源はlogos（言葉）をphilein（愛する）ことであり、蜂谷さんはまさにphilologistであったが、その、性率直ニシテ多感ノ人が、もう50年余も前に、役にしか立たない英語、云々の発言にうかがえる危惧の念を、世の動向によって日常に強いられていた苦衷はいかばかりであったか。

当時の教育体制の動向を正確に理解するには、まず、政治的・経済的・社会的な条件を見ておく必要があるけれども、いまは立ち入らず、さしあたって、古典古代に淵源する人文学humanitiesという狭い領域に限って、それも人文学と、その出発点である人文主義humanismについて、主題と見なすべき箇所を簡略に述べるにとどめたい。

古代ギリシアのpaideia（教育・教養）の理念、そして、それを生み出したdēmos（民主政・市民）という現実の政治体は、ヨーロッパの歴史に対して、近代に至るまで、他に類を見ないほどの深い影響を及ぼしてきた（それが世界規模に拡散していることは言うまでもない）。古代ローマはキケローを中心に、paideiaを移植して、humanitasと命名し、教育、教養、礼節、人間的であること、という一連の理念を人生の理想として標榜した。そこから、中世の自由学芸artes liberalesに引きつがれた教養教育の体系が構成され、やがてルネサンスを迎えるわけだが、ルネサンスの人文主義を支える二本柱の一つはローマ人の理想であり、もう一つは文献学であった。

私は以前、polis（都市）、logos（言葉、理性）、humanitas（人間的であること）という三つの要素の調和を文明civilizationと呼んで、文明は、人文主義という人間精神の批判的（論証的）機能の活動の純粋な精華に他ならないと論じ

たことがある。文明という語をかかるとして使用する場合は、進歩の思想には与しないといくら明記しておいても、誤解を招きやすいところだが、私の思うに、civilizationという18世紀の造語が、civis（市民）を語源とすることの歴史的意義を無視することは許されない。文明という言葉ができた啓蒙の世紀には、文明の解体がすでに進みつつあったわけだが、この逆説に対峙し、これに問いかける中で得られる思想は瀟々たるニヒリズムの対蹠点として、測り知れぬ価値を持つにちがいない。そして、私見によれば、文明は歴史の普遍的理想である。反時代的な意味において。

上のエッセイは「モナ・リザの鳶色の眼」と題して、「人文論叢」第56号（2008年1月刊）に発表したもの。私はその年の3月に依願退職したので、最後の寄稿である（文を一部添削し、拙著、「文集 モナ・リザの鳶色の眼」2017年刊、に収録した）。

さて、人文学は人文主義の申し子ながら、文明の解体とともに、やはり変質を強いられた。それは近代科学に由来する方法と概念体系の人文学への侵入による。人文学の伝統につながるヨーロッパの諸学は、それでも少数ながら、真に力量ある学者の力技によって人文学的業績を生み出してきたが、日本に関しては、近代科学の制度上の移入が直ちに江戸時代の人文学的伝統の容赦ない切斷を意味したこともあって、以来、「人文科学」を構成する既成の個別科学の習得と専門的・技術的達成とがひたすら奨励されることになった。私はむやみに否定的な言辞を弄するつもりはないので、問題の核心にまっすぐ踏み入るなら、それは、人文諸学にあっても、事物の世界を対象とする科学の価値中立的な言語が、およそ人文主義の基盤である、先に述べた、経験としての言葉を、当事者の自覚がないままに、心の片隅に追いやっているという事実に見るべきである。言語は、かくして、一方では、日常のコミュニケーションの道具としての言語であるか、そこには、情報の入手と交換でしかない言語使用も含まれるが、他方では、日常の生活にますます縁遠い、主観性を排した、抽象的で中立的な記述言語であるか、のいずれかに偏向してゆかざるをえない。

人文主義は言語の偏向を見極めて、経験としての言葉の現実を直覚し、言葉

の本来の生命である創造的自由を確保しようとする、精神の普遍的で批判的な志向のあり方である。

ここで、サイドの遺著 *Humanism and Democratic Criticism* (Columbia Univ. Press, 2004, p. 61) の一文を引けば (拙訳)、著者は文献学を人文主義の実践の基礎にもとめ、

その基礎とは、歴史の中に実存する人間の言語活動に使用されている言葉とレトリックを細部まで忍耐強く吟味し、かつ、この注意深さを生涯にわたって保つことだ、

と述べている。いかにもそうである、文献学は個人の一生の事業であり、有用性を越えたところで、歴史に、過去と未来に、証言として係わっているのだ。ただし、かく表現されると、文献学者のイメージは老成した、厳しく孤独な風手に思い浮かぶけれども、もともと、古代ギリシアでは、言葉の価値は対話という形式の中で把握されているので、もっと若々しい、活発で潑刺とした姿を示している。次の引用は、プラトンの「パイドロス」の一節 (拙訳)。

ソクラテス：まさにその通りだよ、パイドロス君。だが、わたしの思うに、それら〔正義、その他〕に対する真剣さがもっとずっと美しいものになるのは、人が、相手としてふさわしい魂を得て、問答の技術を用いながら、言葉を知識とともに植えつけたり、種播きをしたりするときなのだ。それらの言葉には、当の相手を、また植えつけた本人をも、助ける力がある。言葉は不稔ではなくて、一つの種子をつけ、そこから別の言葉が別の住みかに生まれ、かくして、常に不滅のままに受け継がれてゆくことができる。つまり、言葉は、それを所有している人に、人間におよぶ限りの大きい幸福をもたらしてくれるのだ。 *Phaedrus*, 276E. 5 f., LCL. 36, 1990, p. 568f.

マルクスが言ったように、ギリシア人は、人類がもっとも美しく花をひらいて、永遠の魅力を發揮している歴史の幼年時代の健全な子供であった（「経済学批判序説」）。

しかしながら、人文主義は西洋文明に固有のことではない。政治体制をひとまず不問に付すなら、中国・インド・アラビア、等の文化にも、そして、先にふれたごとく、日本文化にも存在する。日本で、誰もすぐ思い当たるのは、「万葉代匠記」の契沖を先達とする国学、古学、儒学の業績である。契沖の文献学を「元祿のヒューマニズム」と呼ぶ、中村幸彦の「契沖讚」（「著述集」第十二巻）を、そして、小林秀雄が著書の「本居宣長」（七）に引いている、契沖の石橋新右衛門宛の書簡を是非参看されたい。いまは、次に、時代を鎌倉までさかのぼって、道元の「正法眼蔵」十二巻本（三時業）の文章を写す。

しかあればすなはち、行者〔修行者〕かならず邪見なることなかれ。いかなるか邪見、いかなるか正見と、かたちをつくすまで〔生の終わるまで〕学習すべし。

道元はむろん文献学者ではない、しかし、人類は一つの種である、言語は多種多様ながら、言語界logosphèresの起原は単数である、かつ、人間の経験のあり方は、根本的には、一つであり、一つしかない、すなわち、人は母語によって他者と社会に、自然に出会い、（書物、芸術を知り）、他の民族の言語と文化に学び、すべて、対話と批判を通して、自己の言葉を、経験としての言葉を内面に樹木のように成長させてゆく、だから、道元の言葉が、認識の批判者として、時に、また、言語による解決を放棄せんとする転身の刹那にも、人文主義者の厳しくもよるこばしい言葉と同一の表現を見せることがあって、何の不思議もない。

渾身似口掛虚空
不問東西南北風

渾身 口ニ似テ 虚空ニ掛カル
問ワズ 東西南北ノ風ヲ

一等為他談般若
滴丁東了滴丁東

一等ニ〔平等ニ〕 他〔彼〕ト般若ヲ談ズ
チチンツンリヤンチチンツン

道元の師、宋の天童如浄の「風鈴」と題する頌（「正法眼蔵」摩訶般若）。これを知った感動を、道元は「宝慶記」（留学記）に「歓喜踊躍、感涙衣ヲ湿ス」（原漢文）と記した。詩句の音調についても「端直ニシテ而モ曲調アリ」とある。師は弟子の感動を深く諾って、「^{なんじ}爾ニ眼アルヲ許ス」と言った。道元が見たものは、けだし、思念の果ての言葉の蟬脱の姿である。

願わくは、言葉を風に唳々と鳴らせ。

さらに、今や、軽躁と阿鼻叫喚がまるで手を取り合うが如く、地球を無残・無気味に覆いつつある、痛苦・痛哭の時代である。だから、言語道断ながら、かのニーチェに倣って言おう（「善悪の彼岸」）、われらは贈る、実直の日常に隠された曖昧と愚鈍に、われらの嘔吐を、と。

人文学が要求すること、それは言葉の自由を命根を尽くすまで見届けることにある。

自由は先験的な観念であり、故に、精神の形式であって、言わば、形式にすぎない。私はその見解を取るのだから、真に恐るべきことだが、言葉の自由が直ちに精神の自由である。

(le 9 septembre 2025)